

6 学力向上アクションプラン

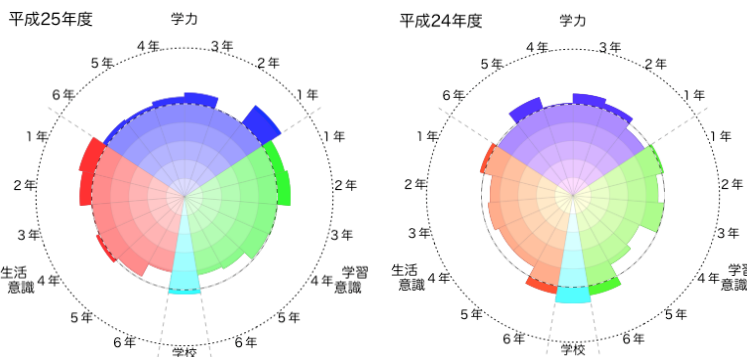
1 学校の状況と地域の実態

- (1) 授業研究を中心とした教師の研究・研修は定着している。仮説を位置付けたテーマを設定し、研究活動の充実を図るために全教職員で協力して研究にあたっている。
- (2) 経験の浅い教師が多く、基礎的・基本的な指導技術をより一層身に付ける必要がある。
- (3) 特別な教育的支援が必要な子どもへの対応の充実を図るために、保護者への連絡を密にするとともに全教職員で連絡や協議を重ねている。
- (4) 保護者の学習に対する関心は高く、児童の学力も高い。しかし、基本的内容を十分理解できているといえない児童もいる。
- (5) 地域ボランティアを活用した学習を積極的に取り入れ、学校・家庭・地域との連携による学習を推進する努力をしている。

2 学力向上に向けて（「中期学校経営方針」より抜粋）

- (1) 確かな学力（「共通取組内容」より）
 - ① 朝学習では教師がついて、計算練習や漢字練習などを中心にした基礎的・基本的な知識や技能の確実な習得や学習習慣の定着を図るようにします。
 - ② 授業研究を通して教師の授業力の向上と日々の形成的評価と指導の一体化を図ります。また、問題解決的な学習で実感を伴った理解のある授業を行っていきます。
- (2) 教育課程・学習指導（「重点取組分野」より）
 - ① 読書習慣の形成や読書活動の啓発を推進する研究実践（蔵書整備補修、図書室環境作り、読み聞かせ活動の充実、図書整備ボランティアとの連携）をします。
 - ② 「学習指導要領」に沿った年間指導計画や評価・評定方法の見直しをします。

3 横浜市学力学習状況調査からの実態把握



(1) 学力の概要と要因の分析

全体的には、横浜市の平均よりやや高い学力を示している。24年度と比較すると全体的に数値が高くなっており、学習の成果がみられる。一方、学習意識と生活意識の低い学年もみられる。学習が好きではないと答えている子どもが2～3割程度存在している。理由としては、分からない、考えを表現できない、などという回答が多く、授業改善が求められている。

(2) 教科学習の状況

- 国語科：全体的に読む力はあるが、学年によっては、考えを文章に表すことや話す聞くことが課題
- 算数科：低学年は技能が、高学年は数学的思考の力がある。低学年では思考を、高学年では技能が課題
- 社会科：全般的に市の平均を上回っている。どの学年の観点においても平均的な学力を発揮
- 理科：知識・理解、思考・表現は平均的な力を発揮。技能の観点については課題

(3) 経年変化の状況と要因の分析（学習・生活意識調査も含めて分析）

学力、学習意識、生活意識とも平成24年度に比べ全体的には向上している。市の平均を上回っている学年も多く、昨年度の学習指導・支援が成果を上げていることがうかがわれる。意識面で市の平均と同等になったのは、授業研究の充実を教師が常に意識して取り組んできたことが結果として表れている。一方で学習が楽しいと感じていない子どもも高学年に比較的多くいる現状を考え、より分かりやすい授業展開や興味をもつことのできるような内容・方法の工夫がさらに求められている。

学校全体では、自分や友だちの考えを出しあって学び合う交流の学習が十分ではなく、その結果、受け身になっていることが多い。基本的には、学ぶ意欲は十分もっている子どもが多く、個に応じた内容や方法を教師が工夫することによって、授業改善が図られると考えられる。

4 平成26年度 目標と具体的方策

目標：「自分の考えをもち、伝え合い、高め合える子ども」を育成するための授業の実現

(1) 学校としての共通の取組

○ 言語活動の充実

授業の中で自分の考えをもち、さまざまな方法で考えを伝え合い、深め合いながら、自分の考えを表現できる授業を行う。

○ 個に応じた指導の充実、特別支援教育の充実

個々の課題を的確に把握し、課題を踏まえた適切な手立てをとった指導を行う。特別な指導が必要な子どもの指導には全職員でかかわる。

○ 研究・研修体制の充実、教材研究の時間確保

二・三年次研修、五・十年次研修、校内授業研究会を充実させ、授業力向上をめざす。子どもが楽しい、分かる、やってみたいと感じるような授業をめざして教材研究を充実させる。また、教材研究の時間を確保する。

(2) 学年としての取組

<1年>

- 国語科では、説明する文章や紹介する文章を書くなどの表現活動をたくさん取り入れるとともに、学び合う場面を学習に位置付ける。
- 自分の考えや感想をはっきり述べたり、分からないことや知りたいことを尋ねたりすることができるような場面を位置付ける。

<2年>

- どの教科においても全体的に横浜市の平均を上回った結果となっているので、交流する時間を確保しながら表現力を高めるようにする。
- 一方、生活意識調査での自己意識が低い。そこで、授業で“できた”という経験を増やして自己肯定感を高め、学校生活全体を豊かにできる子の育成を目指す。

<3年>

- 大事なことを落とさずに興味をもって聞き、意見や感想を述べる場を設ける。
- 社会科等で、見学・調査したことを文章で記録し、友だちと交流する時間を設ける。
- 列挙したり順序をつけたりして考える学習を計画的に行う。

<4年>

- どの教科においても、相手の考えを取り入れて自分の考えを述べたり、根拠をもとに新たな意見をだしたりしながら話し合う場面を多く取り入れる。
- 算数・理科等で、説明する文章、記録、報告する文章を書くなど、表現活動を大切にするとともに、話し合う場面を多く位置づける。

<5年>

- どの教科、どの観点においてもほぼ横浜市の平均を上回り、全体的に力をつけてきているので、学び合いの時間を確保しながら考えを深めたり広めたりできるようにする。
- 意識調査の中からは、表現力の育成の必要性が見えてきた。自分の考えを表現したり自分と違う考えを聞いたる楽しさを感じる授業づくりに努めることにより、みんなで考えを高められる子を育てていく。

<6年>

- 国語では「書くこと」の力を伸ばすために、書く目的や意図を明確に示し、事実と感想、意見等を区別して書くことができるようにする。書いたものを読み合い、自他の表現のよさに気づき、高めあう時間を確保する。
- 算数では、既習の学習をもとに基礎・基本の定着を図る指導を続ける。また、数直線や図をもとに考えることや具体の操作を通して自力解決の時間を確保し、数学的な考え方や活用力を伸ばす。

<個別>

- 個別の教育支援計画・個別の指導計画に基づき、話し言葉、表情、しぐさ、書き言葉等、発達段階の応じた適切なコミュニケーション手段を積極的に活用する場面を設けるようにする。
- 子どもに応じた分かりやすい情報発信をするなど、言語環境の整備を行うようにする。